

令和6年度かづの未来アカデミー創造事業・武蔵野大学発展FS「中心市街地の新たな居場所を考える」報告書

武蔵野大学経営学部経営学科特任教授 小暮真人

参加学生

文学部日本文学文化学科3年 陸文捷
法学部政治学科3年 平田輝
経済学部経済学科3年 堀百花
グローバル学部日本語コミュニケーション学科2年 寺尾大輝
経済学部経済学科2年 大谷巧真
経営学部経営学科2年 加藤佳
経営学部経営学科2年 長妻桃花
教育学部教育学科2年 緑川湖子

(概要)

本報告書は、令和6年8月に実施した発展フィールド・スタディーズ「鹿角市中心市街地」の実施結果についてまとめたものである。令和2年11月に武蔵野大学は鹿角市と包括連携協定を締結し、地方創生にかかる共同研究を進めている。そのひとつが鹿角市の中高生と武蔵野大学の学生によるアンケート調査及びワークショップの実施により、中高生の定住意向の低さ、中心市街地の賑わいの喪失、高等教育機関がないという鹿角市がかかえるトリレンマ¹の解決につなげるという試みである。

これまでにステークホルダーへのヒアリング、街頭インタビューを行い、鹿角市全体の将来像を描き、Uターンの課題、中心市街地の魅力にフォーカスしてきた。特に令和5年度のプログラム結果から、市民は中心市街地に対して買い物空間だけでなく様々な居場所、イベント・催事空間というイメージをもっていること、そして、意外と鹿角の特産品が手に入りにくいという課題があることがわかった。これらの結果を踏まえ、今年度は中心市街地のイベントとして、中学生、高校生、大学生による特産品を販売するチャレンジショップを行った。さらに、新たな居場所に関する市民インタビュー、重要文化財でのインターンシップを実施し、中心市街地の買い物だけでなく新たな価値を考えるワークショップも行った。

1. 中心市街地問題

全国各地の中心市街地が衰退しているが、その原因として東京一極集中による人口減少

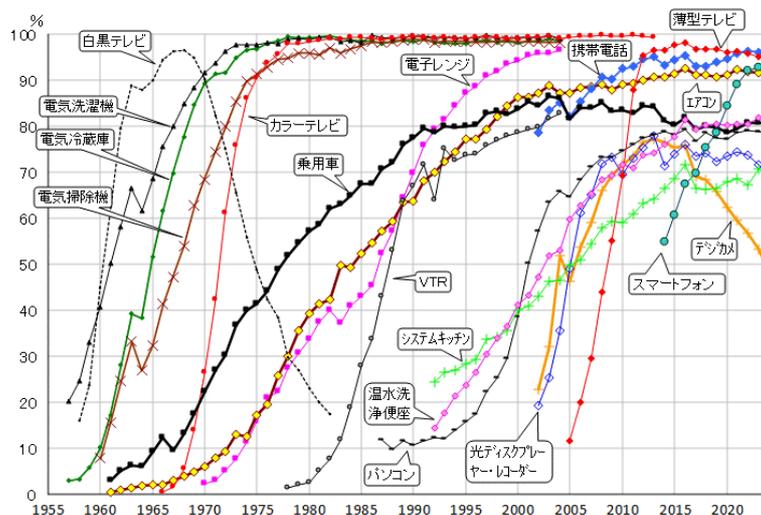
¹ トリレンマとは、三つの選択肢や要素が関連し合い、同時に全てを満たすことが難しい状況を指す。特に経済学や政治学の分野でよく使われる概念である。

が指摘されている。地方創生は、この東京一極集中を是正することを目的の一つとしており、具体的には東京から地方への移住や企業移転を促し、また移住者による起業を支援する事業が展開されている。しかし、中心市街地、商店街が衰退した要因は人口減少によるものなのだろうか。

例えば、冷蔵庫の普及による消費行動の変化である。冷蔵庫がない時代は各家庭では生鮮三品の保管ができないので、毎日、近所の商店に買いに行く必要があった。この時代の商店は消費者の代わりに野菜や魚を市場から購入し、冷蔵庫の無い家庭に代わってお店で商品を保管してくれたのである。しかし、令和3年調査で冷蔵庫の世帯平均台数は1.19台となっているようにほとんどの家庭にある。冷蔵庫があると一般の家庭では毎日の買い物は不要になる。

また、郊外型ショッピングセンターと自家用車の普及が商店街の衰退に拍車をかけている。当初、大規模小売店は商店街に立地して既存商店との共存共栄を望んだが、当時の商店会は顧客がとられることを危惧して大店の進出に反対した。その結果、大規模小売店舗法が成立し、ショッピングセンター等の大規模小売店の郊外立地が進んだ。さらに、自家用車の普及とも相まって、多くの家族がマイカーを所有しレジャーを兼ねて、郊外のショッピングセンターへ行き、日常生活に必要なものをまとめ買いをするようになったのである。

主要耐久消費財の世帯普及率の推移(1957年～2024年)



(注) 二人以上の世帯が対象。1963年までは人口5万以上の都市世帯のみ。1957年は9月調査、58～77年は2月調査、78年以降は3月調査。05年より調査品目変更。多くの品目の15年の低下は調査票変更の影響もある。デジカメは05年よりカメラ付き携帯を含みます。薄型テレビはカラーテレビの一部。光ディスクプレーヤー・レコーダーはDVD用、ブルーレイ用を含む。カラーテレビは2014年からブラウン管テレビは対象外となり薄型テレビに一本化。
(資料) 内閣府「消費動向調査」

そして、共稼ぎ世帯の増加も商店街の衰退に大きな影響を与えている。高度成長期は、専業主婦が多いので、毎日、近所の商店街の八百屋、魚屋、肉屋など複数のお店を回って生鮮食品を買った。しかし、女性も働くようになると商店街で買い物をする人は激減した。働く人たちは時間を節約する必要があるので、通勤帰りに駅前のスーパー1箇所で食品を買い求めることが増えた。しかも、生鮮食品でなく冷凍食品、総菜、調理済み食材などの需要が増

加している。

ほかにも少品種大量消費から多品種少量消費へ、それぞれが自分にとって価値のある商品を選んで購入し、できるだけ長く使う、ネット購入など様々な消費行動の変化が起きている。



いずれにしても、高度成長期のように人々が横のデパートといわれた商店街で複数の店舗を回って買い物をするのでなく、スーパー、コンビニ、近郊の大型ショッピングセンター、専門店など一つの場所で買い物をするようになっている。広告を打たなくても商店街に来てくれた時代はもう終わっているのである。

ほかにも、商店街の衰退の原因が人口減少に起因するものではないとする理由として、東京23区の商店街も衰退しているという現実がある。もちろん、銀座、新宿、渋谷など広域型商店街は依然として賑わいを続けているが、墨田区、荒川区では人口が増えているにもかかわらず近隣型商店街の多くはシャッター街化している。

墨田区



荒川区



豊島区



また、もう一つのエビデンスとして、高度成長期は鉄道、駅が開業すると駅前商店街が形成されたが、今は、新しく駅ができて商店街は形成されない。こうした傾向は、日暮里・舎人ライナー、北総線など高度成長期以降に開業した鉄道の駅で見られる。つまり、我々が生活する上で、身近に商店がなくても、困らない社会となっていることの証左でもある。

舎人ライナー高野駅



舎人ライナー西新井大師西駅



舎人ライナー江北駅



2. 中心市街地活性化法

商店街の衰退は、1980年代から始まっているが顕著になったのはバブル経済崩壊後の長期不況下である。国は対策として1998年に中心市街地活性化法をつくり、現在も全国の中心市街地の再活性化を誘導している。中心市街地活性化法は地域活性化が目的ではあるが、その多くは再開発事業を伴っている。さらに、こうしたプロジェクトの多くは東京に本社を置くデベロッパー（土地や街を開発する事業者）が受注していることから、中心市街地活性化は当該地域の活性化だけでなく、景気浮揚策としての政策効果ももっている。

ところで、中心市街地という言葉はこの法律によって生まれた。法律が規定する中心市街地は、「小売商業者」及び「都市機能」が集積し、さらにその自治体で「中心としての役割」を担っている市街地のことである。小売商業者の定義は日本標準産業分類で具体的に示されているが、都市機能については都市計画法の条文に使われているだけで定義は明文化されていない。しかし、国土交通省は都市機能立地支援事業を行っており、その対象事業は「中心拠点」、「連携生活拠点」、「生活拠点」などを誘導する施設となっている。具体的には道路、公園、市民ホールなど公共施設だけでなく民間の病院、銀行、ホール、商店などの整備も対象となっている。つまり、都市機能を担う施設は事業目的の範囲内で多様に存在すると考えられる。

いずれにしても、中心市街地は全国共通の基準で決まるのではなく、中心市街地活性化法の適用を受けるために、各自治体が国に申請する際に都市機能を担うとした施設が集積している、又は今後、集積させる地域ということになる。

直近の中心市街地の認定は令和6年3月26日付けで行われ、具体的には小国町（山形県）、宮古島市（沖縄県）、高山市（岐阜県）、白河市（福島県）、土浦市（茨城県）、沖縄市（沖縄県）、八戸市（青森県）の7市町における市街地が認定された。2006（平成18）年度に事業がスタートし、これまでに下表のとおり155団体が認定されている（内閣官房・内閣府総合サイトより引用）。この155団体という認定状況は、全国には2024年10月1日現

在 1747 の市区町村があるので 1 割にも満たない。つまり、中心市街地活性化法の適用を受けていない自治体がほとんどなのである。認定を受けていない自治体は、その地域の中心的な市街地に何の対策もしていないのではなく、国の補助事業によらないで自治体独自に施策を行っている。その一つが秋田県鹿角市である。

中心市街地活性化基本計画認定市町村一覧: 155 団体

令和6年4月時点で、155 団体(累計283 計画)が認定済(②、③、④は認定の回数)、計画期間中は52 団体(53 計画)。
黒字は計画期間終了の自治体。赤字は計画期間中(取組実施中)の自治体。

北海道	函館市、小樽市、旭川市、 帯広市③ 、北見市、岩見沢市②、稚内市、滝川市、砂川市、富良野市②	滋賀県	大津市②、長浜市②、 草津市② 、守山市②、 東近江市②
青森県	青森市②、弘前市②、 八戸市④ 、黒石市、十和田市②、三沢市	京都府	福知山市②
岩手県	盛岡市②、久慈市②、遠野市②	大阪府	堺市、高槻市②、 茨木市
宮城県	石巻市③	兵庫県	神戸市(新長田)、 姫路市③ 、尼崎市、明石市②、 伊丹市③ 、宝塚市、 川西市③ 、丹波市②
秋田県	秋田市②、大仙市	奈良県	奈良市
山形県	山形市③ 、鶴岡市②、酒田市②、上山市②、 長井市② 、 小国町	和歌山県	和歌山市、田辺市
福島県	福島市③ 、会津若松市、いわき市、 白河市③ 、須賀川市②	鳥取県	鳥取市④ 、米子市②、 倉吉市②
茨城県	水戸市② 、 土浦市③ 、石岡市、 鹿嶋市	島根県	松江市③ 、江津市、雲南市
栃木県	日光市、大田原市	岡山県	倉敷市③ 、津山市、玉野市
群馬県	高崎市③	広島県	三原市② 、府中市②
埼玉県	川越市②、蕨市、寄居町、 志木市	山口県	下関市、 宇部市 、 山口市③ 、岩国市、 周南市②
千葉県	千葉市、 木更津市 、柏市②	徳島県	徳島市
東京都	八王子市② 、青梅市、府中市	香川県	高松市③
神奈川県	小田原市	愛媛県	松山市③ 、西条市
新潟県	新潟市、 長岡市③ 、十日町市、上越市(高田)	高知県	高知市③ 、四万十市
富山県	富山市④ 、 高岡市④	福岡県	北九州市(小倉・黒崎)、大牟田市、久留米市②、直方市、飯塚市
石川県	金沢市④	佐賀県	唐津市②、小城市、基山町
福井県	福井市②、敦賀市、大野市②、越前市②	長崎県	長崎市② 、諫早市②、大村市
山梨県	甲府市②	熊本県	熊本市④ 、熊本市(植木)、八代市、山鹿市、 益城町
長野県	長野市②、上田市②、 飯田市③ 、塩尻市	大分県	大分市④ 、別府市、佐伯市②、竹田市、豊後高田市②
岐阜県	岐阜市④ 、 大垣市③ 、 高山市② 、中津川市②	宮崎県	宮崎市、日南市、小林市、日向市
静岡県	静岡市(静岡・清水)③、浜松市②、沼津市、 島田市 、掛川市②、 藤枝市④	鹿児島県	鹿児島市③、奄美市
愛知県	名古屋市、豊橋市②、 豊田市④ 、安城市、東海市、田原市	沖縄県	沖縄市③ 、 宮古島市
三重県	伊勢市② 、伊賀市		

2.1 地方都市と東京の中心市街地

地方と東京を対比した場合、確かに地方の人口減少及び中心市街地の衰退は著しい。こうした観点から中心市街地活性化法の認定も地方都市が多くなっている。

中心市街地は、自治体における「中心としての役割」という趣旨からすると、国が認定するかどうかは別として、理論的には全国の区市町村に必ず一つあることになる。しかし、東京 23 区や大阪市などでは、その地域全体に小売商業者と都市機能が集積しているため、特定の地域を「中心としての役割」として決めることは困難である。例えば、墨田区では中心市街地活性化法の申請を検討した際に、狭い区域の中に商業が集積している地域、集積していた地域が複数あるにも関わらず、一定の地域だけを中心市街地することの説明が困難なことから断念した経緯がある。



秋田県鹿角市



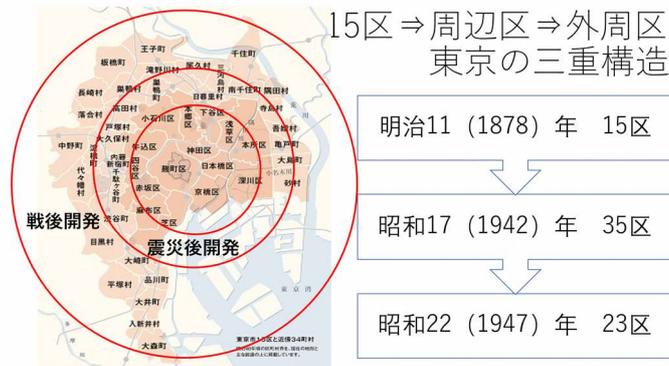
青森県弘前市



東京都中央区（銀座）

2.2 東京 23 区における市街地の衰退問題

東京 23 区では、それぞれの区の中で賑わっている地域と賑わっていない地域を線引きすることは難しいが、23 区間では商店街の盛衰には差が見られる。例えば、千代田区、中央区、港区には広域型の商店街が多く、大変な賑わいを見せているが、都心三区から外側に行くほど人通りが少なく、シャッター街化した商店街が増える傾向がある。日本全体では東京の一極集中と人口減少が問題となっているが、東京 23 区においても都心区と周辺区で賑わいの差が生じており、中心市街地問題は顕在化している。



東京 23 区の市街地拡大過程

2.3 全国にある中心市街地問題

東京対地方という賑わいを巡る対峙を背景に、中心市街地問題は全国の各自治体が抱えており、その解決が日本の大きなテーマとなっているが、東京 23 区においても都心区と周辺区で商店街の賑わいの差が生じている。つまり、東京と地方という対立とは関係なく、日本の全ての地域において中心市街地対策が求められているのである。

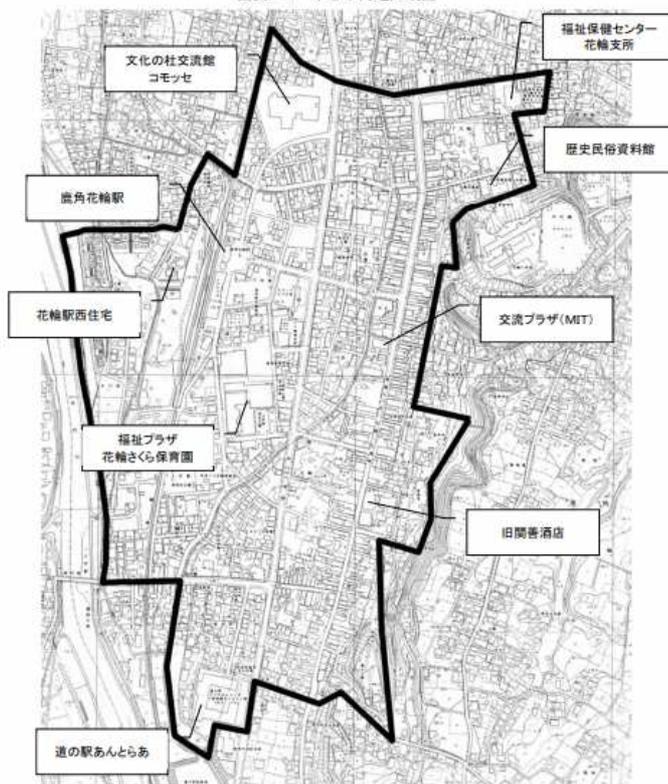
3. 鹿角市中心市街地の概要と可能性

3.1 中心市街地の現状

鹿角市は歴史的に鉾山町であったのと同時に、弘前、八戸、盛岡などとの交通の要衝でもあったことから商業都市、政治都市として発展してきた。人口のピークは、1955 (昭和 30) 年の 60,475 人であるが、日本が高度成長期にあったことから都会への人口流出が始まり、1978(昭和 53)年に尾去沢鉾山が閉山すると生産年齢人口の減少に拍車がかかり、今日に至っている。

鹿角市の中心市街地は、商業地域及び都市機能が集積している地域である。具体的には、4つの商店街があり、福祉保健センターやコモッセなどの公共施設、JR 鹿角花輪駅、道の駅あんたらあ、金融機関、病院、歴史・文化施設等が集積している。

図表 1-1 中心市街地区域図



中心市街地の人口は減少傾向、世帯数は横ばい状況であるが、市全体に占める中心市街地の人口、世帯数の割合は上昇しており、人口、世帯数ともに市全体の約1割を占めている。人口減少が続く鹿角市にあって中心市街地は一定の経済機能、都市機能、人口規模を保っており、鹿角市にとって重要な地域である。しかし、商店街の歩行者通行量は年々、減少し、空き店舗も増加するなど、厳しい状況に置かれているのである。

もちろん、商店街振興組合もイルミネーション、植栽活動など環境整備事業、スタンプラリー、セールなど販売促進事業、WEBサイト・SNSを活用した情報発信などを展開してきた。また、行政も商店街振興組合の共同事業への補助、空き店舗バンク、起業・創業支援など行ってきた。しかし、中心市街地の来街者や売り上げのV字回復には至っていない。

3.2 これまでのワークショップと中心市街地の新たな可能性

こうした中心市街地の状況を踏まえて、2021(令和3)年から武蔵野大学の学生と鹿角市の中高生で鹿角市の中心市街地問題を考えるワークショップを行ってきた。このワークショップは、鹿角市はかづの未来アカデミー創造事業として中高生が参加するプログラムとして、また、武蔵野大学では発展フィールド・スタディーズ(以下「FS」という。)として

位置付けて実施している。

令和3年度及び令和4年度は、鹿角市の将来像を描き、バックキャスト²して鹿角市の課題として中高生が定住意向を高めること、具体的には進学、就職等で鹿角市を一度離れても、いつかふるさと鹿角に戻ってくるための課題を整理した。そして令和5年度は「鹿角市の中心市街地の魅力問題」を探るために街頭インタビューを行い、フューチャーセッション³を行った。

この間のプログラムで中高生と大学生の見た中心市街地は、高度成長期のように商店が林立したまちではなく、住宅、オフィス、飲食店、介護事業所など様々な機能が集積したまちである。令和5年度のフューチャーセッションでは、中心市街地の将来像は「人が集まる」、「賑わいがある」という状態を描いたが、それは買い物客で賑わうといよりも、様々な市民の居場所として賑わうというイメージを描いている。そのために空き店舗や空き地の活用、様々な世代の居場所づくり、情報発信力の強化が課題として挙げられた。確かに、中心市街地には空き店舗が多く、歩いている人も少ないことから子供やお年寄りも近寄り難い場所となっている。買い物以外の目的でも子供や、お年寄り、若者、あらゆる世代が平日、あるいは土日に来街する機能や仕掛けが考えられる。実際に、街頭インタビューから中心市街地の魅力は、日常の買い物、ブランド品が購入できるということではなく、様々な世代の市民の居場所、イベントや情報発信の場があることという声が多かった。また、鹿角の特産物が市街地で買えないという意見もあった。

このように、鹿角市の中心市街地は商業機能や都市機能が集積した空間ではあるが、イベント、情報発信など様々な市民の居場所や交流の機能としての価値も中心市街地の新たな可能性として検討に値するのではないだろうか。

3.3 2024年プログラム「中心市街地で市民の新たな居場所を考える」

そこで、今年度の発展FS「鹿角市中心市街地」では、中心市街地の魅力を具体化する中高生及び大学生によるイベント、鹿角の特産品を販売するチャレンジショップを中心に国登録有形文化財「旧関善酒店」でのインターンシップ、街頭インタビュー、ワークショップを行った。

今回のワークショップは、鹿角市の中高生8名と武蔵野大学の学生8名が参加し、8月8日（木）から13日（火）までの6日間、実施した。

ワークショップは①ストーリーテリング⁴とラテラルシンキング⁵演習、②チャレンジシヨ

² 未来の理想的な状態を描き、その未来像から現在へとさかのぼって現在の行動を計画する思考法やシナリオ作成手法。

³ 多様な立場の関係者による対話を通じて、複雑な問題の解決を目的とした手法。

⁴ 物語を語り聞かせたり、体験談やエピソードなどの「ストーリー」を利用して伝えたりする手法。

⁵ 物事の角度を変えて多角的に考察し、新しい発想を生み出す思考法。

ップ体験、③街頭インタビュー調査、④文化財インターンシップ、⑤フューチャーセッション、⑥バックキャストイング、⑦クイックプロトタイプイング、⑧プレゼンテーションの8ステップで構成した。ワークショップのうちデスクワークは「武蔵野大学鹿角サテライト推進拠点」で行い、チャレンジショップは旧関善酒店のこもせ、文化財インターンシップは旧関善酒店内で実施し、街頭インタビューはチャレンジショップ、鹿角市文化の杜交流館「コモッセ」、鹿角花輪駅前観光案内所、鹿角観光ふるさと館「あんたらあ」の4箇所で行った。

参加者

武蔵野大学	鹿角市
文学部日本文学文化学科3年 陸文捷	秋田県立鹿角高等学校3年 石黒亜惟
法学部政治学科3年 平田輝	秋田県立鹿角高等学校3年 齊藤花穂
経済学部経済学科3年 堀百花	秋田県立鹿角高等学校3年 齊藤柚希
グローバル学部日本語コミュニケーション学科 2年 寺尾大輝	秋田県立鹿角高等学校3年 佐藤のぞみ
経済学部経済学科2年 大谷巧真	秋田県立鹿角高等学校3年 田中杏佳莉
経営学部経営学科2年 加藤佳	秋田県立大館鳳鳴高等学校2年 三ヶ田陽香
経営学部経営学科2年 長妻桃花	秋田県立鹿角高等学校1年 海沼実羽
教育学部教育学科2年 緑川湖子	鹿角市立十和田中学校3年 成田裕帆

令和6年度 かつの未来アカデミー×武蔵野大学発展FS「鹿角市中心市街地」日程Ⅰ

日程	場所	時間	内容
8月8日(木)	まちなかオフィス	09:30～	参加者紹介、プログラム説明(小暮)
		09:40～	中心市街地問題とは(小暮)
		10:10～	鹿角市の中心市街地の現状と課題(海沼)
		10:40～	チームづくり、他己紹介、ラテラルシンキング(小暮)
	旧関善酒店	12:00～	昼休憩・移動
		13:30～	チャレンジ・ショップの説明、陳列方法・売り方のアイデア(地域商社)
15:10～		インタビュー調査について(小暮)	
8月9日(金)	旧関善酒店	09:30～	準備(設営、商品陳列、POP等) 開店 街頭インタビュー 旧関善酒店インターシップ ※昼休憩は別途指示
		15:30～	閉店・後かたづけ
8月10日(土)	旧関善酒店	9:30	開店 街頭インタビュー 旧関善酒店インターシップ ※昼休憩は別途指示
		15:30～	閉店・後かたづけ
8月11日(日)	旧関善酒店	09:30～	開店 街頭インタビュー 旧関善酒店インターシップ ※昼休憩は別途指示
		15:00～	閉店、撤収作業
		16:00～	インタビュー調査結果整理
8月12日(月)	まちなかオフィス	09:30～	ワークショップ講義(パーソナルワーク、ブレーンストーミング、KJ法、ワールドカフェ)
		10:30～	ワークショップⅠ「中心市街地に求められる居場所の未来を考える？」 ・インタビュー調査結果の活用
			ワークショップⅡ「居場所の未来に向けてどんな課題があるか？」
		12:00～	昼休憩
		13:00～	ワークショップⅢ「みんなが幸せになれる居場所のために課題をどう解決するか？」
		14:30～	クイック・プロトタイピング(壁新聞)づくり 各班、インタビュー調査結果を発表するためのバワポを作成する
15:30～	発表方法説明、MC選出		
8月13日(火)	まちなかオフィス	09:30～	ワークショップⅣ「クイックプロトタイピング及びバワポ資料のブラッシュアップ」発表準備(役割分担)
		12:00～	昼休憩
		13:00～	会場設営
		13:30	開場
		14:00～	市民公開型報告会
		15:30	閉会
		16:00	解散



今回の特徴は、前年の調査結果から中心市街地の新たな可能性として鹿角市の特産品や名産品を販売するイベント「チャレンジショップ」を実施したことと、中心市街地にある国登録有形文化財「旧関善酒店」でのインターンシップを経験したことである。日常的に人通りの少ない空間でイベントを実施することでどのような効果があるのか、文化財をどのように地域として生かすことができるか、中高生と大学生の自らの体験と市民の声をもとに中心市街地の新たな居場所、価値について考えたものである。



3.4 あらたな居場所の提案

A班 リピーターいらっしやい計画

A班は、恵まれた自然の中に鹿角市の中心市街地にあることに着目し、サバイバルゲームを提案している。サバイバルゲームで内外から人を集め、商店街ではゲーム参加者、ゲームに参加しない人も「寄り道」できるスペース、キッチンカーを市民が運営するという市民総出のイベントである。また、ゲーム参加者、来街者をリーズナブルに受け入れるために、空き家を活用することも提案している。

B班 住みやすく将来性のある街

B班は市民の声を受け止めて対話を深めた結果、市民の住みやすさとその将来性という切り口で整理している。住みやすさは買い物と交通の利便性、子育て環境で決まる。市民に

とっては個店よりもショッピングモールの方が利用しやすく、個店は店構え、雰囲気から入りにくいという意見である。個店は客を店内に呼び込むのではなく、デリバリー、キッチンカーなどアウトリーチを提案している。また、空き店舗を活用した子育て環境の整備を提案している。

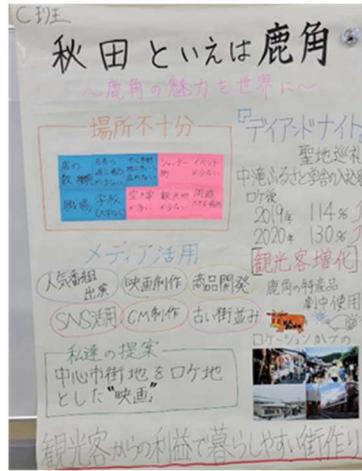
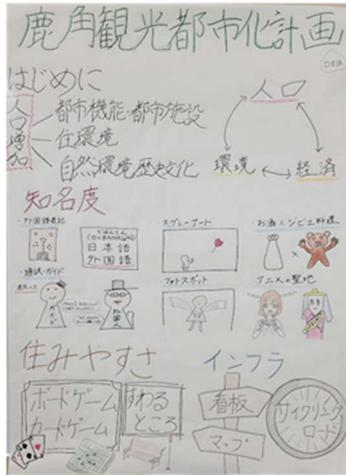


C 班 秋田といえば鹿角～鹿角の魅力の世界に～

C 班は、鹿角市の知名度は低い、秋田といえば鹿角をイメージする人が増えるようにするにはどうしたら良いかという切り口からフィルムコミッション活動の強化を提案している。映画『ダイヤモンドナイト』は鹿角市の中滝ふるさと学舎で撮影され、その後ロケ地ツーリズムで訪れる人が増えている。そこで、中心市街地をロケ地とした映画を誘致し、鹿角市の知名度を高め、上映後は聖地巡礼の観光客を増やすことで活性化を図るというアイデアである。

D 班 鹿角観光都市化計画

D 班は、鹿角市にある地域資源を地域の強みとして生かすことができていないという課題に対して、地域資源の掘り起こしとブラッシュアップを提案している。そのベースには、地域の人口と経済と環境の循環という考え方がある。鹿角には大湯環状列石、日本酒、ジビエ、フォトスポットなど内外にアピールできるものがたくさんある。どばんくんクッキーにストーリー性をもたせる、地酒とジビエを組み合わせる、シャッターのままではなくアートを描くなど水平的思考によるユニークな提案となっている。



3.5 チャレンジショップ

来店人数 460人
 購入者数 220人
 売上 224,962円

	8月9日(金)	8月10日(土)	8月11日(日)
		12:00~15:30	9:30~15:30
売上(日額)	45,342	102,260	77,360
売上(時間)	12,955	17,043	15,472



(広報)

鹿角市長定例記者会見 4月22日、7月29日
 武蔵野大学・鹿角市共同プレスリリース 7月29日
 チラシ配布・ポスター掲出 7月29日以降

鹿角市・武蔵野大学巴治産情協定開始4周年事業

「鹿角市の魅力を」
 わたしとて鹿角市。大学生と一緒に
 学ぶのが、わたしとて鹿角市。わたしとて鹿角市。

かづの未来アカデミー
 鹿角市の中高生と武蔵野大学の大学生による賑わいづくり

チャレンジショップ・かづの

目玉商品！ 燻りラムレーズン
 武蔵野大学の学生と地産地消推進協議会がコラボして、
 燻りラムレーズンが日頃の販売を増やしています！

ホルモンうどんたれ
 フードにこだわって、こだわって、
 フルーツサンゴリア
 フルーツサンゴリア 製造(販売)会社
 のまき食品です。是非、試食を
 ください！ 作り上げました。

ポルモンうどん、かづの牛乳糖菓子の製造販売
 とれたて新鮮、フルーツの濃厚風味
 していただきます。みんなに
 鹿角市を味わって、鹿角市を味わっていただきます！

場所：旧関善酒店 先着の名額にグッズプレゼント！
 日時：8月9日 12:00~15:30
 8月10日 9:30~15:30
 8月11日 9:30~14:30
 ※天候などにより開催が多少前後する可能性があります。

主催：武蔵野大学 協力：鹿角市、株式会社さくら鹿角カンパニー、NPO鹿角賑わい協働

中心市街地の賑わいについて鹿角市の中高生と武蔵野大学の学生が共同で調査研究しています

2022年 鹿角市の未来
 中心市街地を再開発する
 中心市街地を再開発する
 中心市街地を再開発する

2023年 中心市街地とは
 中心市街地を再開発する
 中心市街地を再開発する
 中心市街地を再開発する

2024年 チャレンジする
 中心市街地を再開発する
 中心市街地を再開発する
 中心市街地を再開発する

3年間における鹿角市の中高生と武蔵野大学の学生による調査研究をカタチにしました。
 インタビュー調査等、ご協力いただいた皆様、ありがとうございます。

鹿角市水産に特化した、
 観光客を呼び、鹿角市
 中心市街地の賑わいをお話
 させていただきました。今年
 は、鹿角市チャレンジシ
 ョップというイベントを通じて、
 もっと多くの市民の方から
 お話を伺い、若者目線に立
 ったこれからの中心市街地を
 築きたいと思っています。

武蔵野大学鹿角市連携推進委員会
 代表委員 山本 隆夫

主催：武蔵野大学 協力：鹿角市、株式会社さくら鹿角カンパニー、NPO鹿角賑わい協働

3.6 インタビュー調査の概要

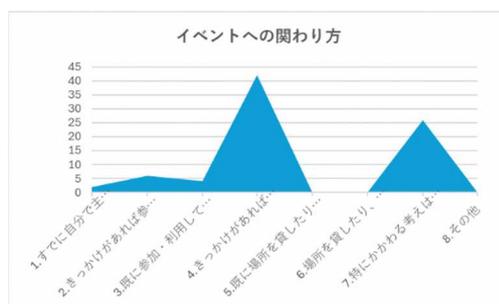
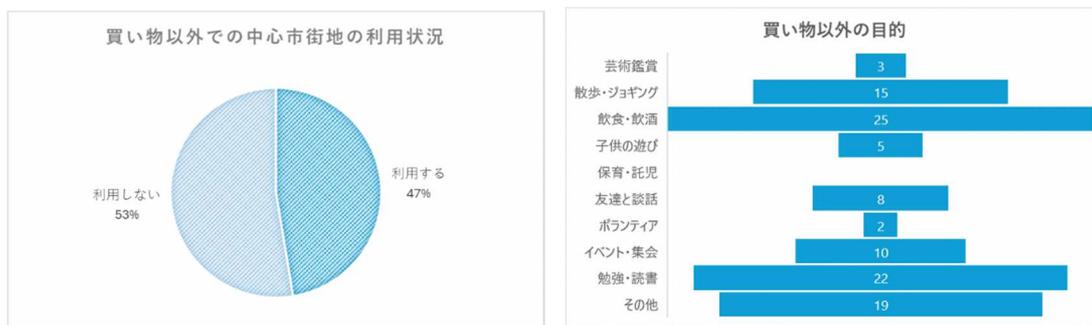
中心市街地の利用状況や市民ニーズを明らかにするために、中高生と大学生が市民を対象にインタビュー調査を行った。概要は以下のとおりである。(調査項目及び回答者概要は26ページを参照されたい。)

○中心市街地の買い物以外での利用

中心市街地を買い物以外で利用する割合は約半数で、飲酒・飲食、勉強・読書、その他、散歩・ジョギング、イベント・集会、友達と談話、子どもの遊びとなっている。商店の街から飲食店の街に変わっている可能性がある。

○中心市街地のイベントについて

今回のチャレンジショップのようなイベントが今後も中心市街地であったとしたら「きっかけがあれば参加したい」という回答が最も多いが、次に多いのが「特に関わる考えはない」となっている。イベントへの態度は、両極化の傾向がある。しかし、若い人達の参加意向が高くなっていることに注目したい。



4. 鹿角市の未来に向けて

2024年8月17日、時事通信社が「なぜ少子化対策はことごとく外れたか」というニュースを発信した。その記事中、「届かない平成世代の声」として政府の各種審議会の委員総数1,883人にもいるにも関わらず10代はゼロ、20代は6人、30代は15人で、この年代が全体に占める割合は1.12%に過ぎないことを取り上げている。若者たちの声が届かない自治体の政策や地域経営に若者たちが共感することはない。選挙権が18歳から行使できるよう

になったことを考えると、若者に様々な発言のチャンスをつくることが重要である。

この点、かづの未来アカデミーは画期的な試みである。鹿角市は中高生の声を形にすることで地域の将来的な持続可能性が高まるという確信をもっている。「将来的な持続可能性」には二つの意味がある。一点目は高校卒業して進学や就職で鹿角市を離れても将来、ふるさと鹿角にUターンすることで定住人口減少の抑制につながることである。鹿角市から出ていくことを容認する背景には若者の多くが経済、情報を求めて地方から都市に行くのは当然のことで、若者の夢を叶える、チャンスを潰さないという思いがある。もう一点は、歴史、文化、食、自然など様々な地域資源を活用することで交流人口、関係人口の増加につながることである。

鹿角市の強みである自然、歴史・文化、スポーツ、食という地域資源を自分たちでどう生かして、それを自分たちのウェルビーイングとするのか。今後も鹿角市の若者たちと市政に注目していきたい。

(最後に)

今回、鹿角市の中心市街地にフォーカスしたが、人口が減少している地域、シャッター通り化した商店街は全国各地に見られる。移住定住の促進は一定の効果はあるものの定住人口が増加に転じる可能性はほとんどない。日本全体の人口減少を考えるとなおさらである。

また、多くの商店街は高度成長期の賑わい、商品を店舗に並べれば型落ちしていても売れた時代を経験している。そして彼らは、消費行動や社会経済状況が変わった現在でも、自分たちのビジネスやビジネスモデルを見直すのではなく、高度成長期の賑わいの再来を信じているように思える。なぜならば、国、都道府県の商業振興策は、高度成長期と変わっていないからだ。もちろん、ホームページ作成、感染症対策事業など時流に対応した施策もあるが、基本は、アーケード、街路灯、カラー舗装などハード整備と中元・歳末大売り出しなど昭和30年代から続く事業である。日本人の消費行動が変わり、流通・販売システムも変わってきことを踏まえると、商店を中心とした市街地から多様な都市機能をもった市街地に変わる必要があるのではないだろうか。というより、現実として、中心市街地は商店を中心とした街から様々な都市機能が集まる街になっている。これからの中心市街地は、商業振興に加えて、様々な都市機能を支援し、そこに住む人、集まる人、働く人、訪れる人たちの福祉、ウェルビーイングの向上を図る必要がある。

参加者の気付き

令和6年度発展フィールド・スタディーズ活動レポート

文学部日本文学文化学科3年 陸 文捷

今回、秋田県鹿角市で実施された「鹿角市中心市街地活性化～地元中高生と考えるまちづくり～」に参加し、地方都市の中心市街地活性化に取り組む中で、多くの貴重な経験を得ることができました。以下に、その中で特に印象に残った気づきや学びについて述べます。

鹿角市という地方都市の現状と課題を直接体感することで、都市との違いに強く気づかされました。都市部では当たり前のように存在する賑わいや利便性が、地方では失われつつあり、例えば交通機関の本数が少ないので、不便があります。そして若者の流出も深刻な問題であることを実感しました。

活動を通じて、鹿角市中心市街地の活性化には地元の人たちの意識改革と主体的な参加が不可欠であると感じました。今回のプロジェクトでは、チャレンジショップの運営やインタビュー調査を通じて、壁新聞を作って、地元の中高生たちとチームを組みました。彼らとの対話を通じて、市街地活性化のためには、単にインフラや施設を整備するだけでなく、地域住民の意識や生活習慣の改変も必要であることを学びました。特に、彼らの視点から見た地域の課題とその解決策と一緒に考えることで、より具体的で現実的な施策を打ち出すことができました。

また、中心市街地活性化においては、コミュニケーション能力やインタビュー力、プレゼンテーション力といったスキルが非常に重要であることを再確認しました。特に地元住民や中高生とのコミュニケーションを円滑に進めるためには、適切な質問を投げかけ、彼らの意見を引き出すことが求められました。これは私にとって、今まさに欠けている能力であり、もっと鍛える必要があると感じています。

共同生活を通じて得られた協調性や自主性も重要な学びの一つです。特に私は留学生なので、このような共同生活は大事な経験であり、同時に大切な思い出だった。9泊10日のプログラム期間中、異なる背景を持つ学生同士が協力し合い、目標に向かって進む中で、チームワークの大切さを改めて認識しました。この経験は今後の社会人生活においても大いに役立つと考えています。

以上のように今回のプログラムを通じて、地域活性化に対する問題や解決策の発想理解を深めるとともに、自らのスキルアップにもつながる多くの学びを得ることができました。今後もこの経験を活かし、地域社会の発展に貢献できる人材として成長していきたいと思っています。

発展 FS 事後報告レポート

法学部政治学科3年 平田 輝

8月5日から14日の10日間、自身を成長させるために中心市街地に関する体験や課題

解決を行う鹿角の発展 FS に参加した。そこで、本稿ではこのプログラムを修了するまでの課程とそこから学んだことや気づいたことについて述べる。

我々のグループが最初に体験したのは重要文化財のインターンシップである。率直に言えば力作業が多く、体力的にしんどかったが、おそらく普段はこの場所の管理を一人もしくは少数で行っている。このような状態では今後長く維持させるというのは難しいため、地元の文化を継承する若者の存在が必要なのだと改めて感じた。

次に、街頭インタビューを行った。街頭インタビューの経験がほぼなかったため、不安な気持ちが大きかったが、鹿角市民は皆寛容でほとんど断られることなく進めることができた。それどころか、鹿角のイベントに参加したいという意欲を持っている人や特色・不満を積極的に話し続けてくれる人もいて、鹿角市民は温和で地元のことを考えている人が多いと感銘を受けた。

続いて、旧関善酒店でチャレンジショップを行った。日程の都合上、ほかの班に比べて携わる時間が少なかったが、買い物ついでに話しかけてくれる人が多く、ここでも鹿角市民の人柄の良さを感じることができた。

最後に、これらの経験を踏まえてワークショップを行った。意見を出し合う際に、自分は解決策が現実味を帯びていること前提として考えていたが、ほかのメンバーは実現できたら課題を根本から解決できるような意見を出し、そこから解決策の具体性を高めるための案を考えていた。結局、グループとしては無事に発表を終えることができたが、個人としては足りない部分がまだまだあると感じた。

これらの活動を通して、気づいたことは鹿角市民が鹿角市について想像以上に興味関心があり、イベントに積極的であったということである。今回の FS のような鹿角市の活性化を促す活動などで刺激を与えることさえできれば、鹿角を盛り上げてくれることに期待ができると思った。また、学んだこととしては、課題解決のためには物事を俯瞰的に見る必要があるということである。今後は、この学びを活かして、課題を広い視野で見つ積極的に意見を出すことを心がけようと思う。ほかにも活動を通じて多くの気づきや学びを得ることができたので、自身の成長へと繋げていきたい。

鹿角市の活性化における PR の重要性

経済学部経済学科 3 年 堀 百花

1. 序論

情報を伝えたいときや、人を集めたいときには PR が必要である。今回、鹿角市でインタビュー、チャレンジショップ、インターンシップを行い、PR を通した鹿角市活性化に伸び代を感じた。鹿角市民からも PR についての指摘をうけるほど、できることは多くあると考えた。そこで今回経験し、課題に感じたことを踏まえて、市民、観光客、文化財や自然、この 3 点において効果的な PR 方法について具体的な考えを述べる。

2. 本論

2-1 市民に向けた PR

インタビューをした際に「イベントの開催情報はいつも知らず、終わった後に存在を知ることが多い」という声を耳にした。漏れなく市民に情報を伝えるためには、対象を絞った PR 方法が不可欠であると考えた。例として、中高生には学校内でのチラシの配布や校内放送、高齢者にはバスや病院などに設置した電子公告や、チラシ入りのティッシュをスーパーで配布することなどが効果的だと考える。また、情報を積極的に受け取ってもらえるよう、市民参加型のイベントを増やすことも重要である。

2-2 観光客増加を促す PR

鹿角市の魅力の一つは食であると考えた。そこで、様々な地域で開催されるグルメフェス等に積極的に参加することが重要である。グルメフェスは多くの人が集まる場所であり、全国に向けて絶好の PR の場である。また、観光地には名物料理があるように、食を通じて観光客の増加につながると考えた。鹿角市を知らない不特定多数に PR するのではなく、多くの人がいる場に出向き、受け手がいる状態で PR することが効果的である。

2-3 文化財や自然の PR

SNS を通じた発信が適切である。数多くある文化遺産や自然遺産を短く一つの動画や投稿にまとめ、発信をする。そして、検索した際に端的にまとめた歴史やアクセスが一目でわかるサイトを作るべきである。インターンシップを行った旧関善酒店を見て、簡単に魅力を知り、歴史を知り、行き方を知ることができると、足を運ぶ人は多いと考えた。

3. 結論

鹿角市は多くの魅力を持つにもかかわらず、伝わっていないということが課題である。さらに、PR には目的や対象に応じて、効果的に発信できるような工夫が必要である。インタビューをした際に配布したチラシをもって、チャレンジショップに来てくださる方は多くいたため、鹿角市民には一人一人に向けた PR をすることが重要であると考えた。このことから、効果的に PR をすることで街の活性化につながるといえる。

「鹿角市中心市街地活性化」

グローバル学部日本語コミュニケーション学科 2 年 寺尾 大輝

1. 序論

秋田県鹿角市で行われた街おこし FS に参加し、地域の魅力を発信するための様々な活動に取り組んだ。このプログラムを通じて、地域社会に対する理解を深め、現場での経験を通して得た気づきや学びを今後の活動にどう生かすかを考えた。本レポートでは、チャレンジショップ、街頭インタビュー、重要文化財でのインターンシップという 3 つの経験を振り返り、それらの経験を今後どのように活用するかについて述べる。

2. 本論

チャレンジショップでは、現地の中高生と共に鹿角市の名産品を販売し、地域の魅力を直接伝えた。現地の人々と協力して商品を販売する中で、地域の人々の温かさや、地元の名産

品に対する強い愛着を感じることができた。このチャレンジショップを通して、地域の魅力を引き出し、効果的に伝えるための様々な工夫を考えた。また、消費者との直接の対話を通じて、鹿角市のことをどのように感じ、考えているのかを知ることができ、コミュニケーションの重要性を再認識した。このようなイベントに対する市民の好意的な意見が多く、市民が鹿角市に対して抱えている思いが伝わった。

街頭インタビューでは、地元の高中生と2人での活動だったが、効率的にアンケートを収集することができた。役割分担を明確にし、協力して進めることで、限られた時間の中で多くの意見をきくことができた。この経験を通して、チームワークの重要性や、どのようにアンケートをすれば鹿角市に対する思いをしっかりと聞けるかを学ぶことができた。また、鹿角市民や訪問者がアンケートに非常に協力的であり、地域イベントへの参加意欲が高いことを感じた。このことから、街に対する市民や訪問者の意識の高さを実感した。

重要文化財でのインターンシップでは、文化財の建物を清掃し、貴重な資料をディスプレイする機会を得た。歴史的な建物や資料に直接触れることで、地域の歴史や文化を深く理解することができた。特に、自分の手で資料をディスプレイするという経験は、文化財の価値を実感する貴重な機会となった。また、文化財の保護と活用について考える機会を得たことで、文化財の保護には多くの費用と労力が必要であることを認識し、今後自分に何ができるかを考えるきっかけとなった。

3.結論

鹿角市でのFSを通じて、地域社会の魅力を発信するための具体的な方法や、地域資源の活用について深く考えることができた。これらの経験は今後の活動やプロジェクトに積極的に生かしていきたい。特に、現地の人々とのコミュニケーションや協力を通じて、街の人々がどのような思いを鹿角に対して抱いているのかがよく伝わった。これからは、地域に根ざした活動に積極的に関わり、地域社会の発展に貢献していきたいと考えている。

心の熱

経済学部経済学科2年 大谷 巧真

鹿角市の魅力は、実に人の温かさにあると考える。日本という国は、たくさんの自然と同様に人で溢れている。しかし、人がたくさん集まっているところに温かさがあるかと言われれば、そうとは限らない。鹿角市には、人と人との温かさがあることを自分は3回の訪問により、経験することができた。温かさというのは、ニホンミツバチの熱殺蜂球のような意味ではなく、何かを変えたいと願う人たち、尽力したい人たちの「心の熱」の「温かさ」のことである。

旧関善酒店インターンシップでは、「心の熱」を感じることができた。旧関善酒店や、鹿角の中心市街地を盛り上げたいという「心の熱」を燃え上がらせた勝山さんがいたのだ。今回行ったのは、蔵の掃除や展示物の見せ方、飲食の販売を手伝った。勝山さんは、1人でこの全ての作業を行おうとしていた。もし自分が勝山さんの立場だったら仕事の多さに心の

熱も冷め切ってしまうだろう。しかし、勝山さんは違った。いつでも元気に店内を駆け回り、誰よりも声を出していた。さらに学生たちにも気を配りながら、いつでも肯定の言葉をかけてくれていた。自分はその姿に感銘を受けた。

街頭インタビューの方達の中で、「若者が鹿角に赴き、自らやりたいと声をあげてくれることがとても嬉しい。」という声や、手伝いをすることによって、とても助かるという声をいただいた。鹿角に赴く僕たち武蔵野大学生にも、もちろん「心の熱」があり、さらに鹿角市の人々によって燃え上がることができると思う。花輪ばやしや、花輪ねぶたでは、鹿角市全体での「心の熱」を原動力にあの迫力を生み出しているのだと強く体感することができた。

自分が初めてこの鹿角を訪れた時、都内から来た部外者が急に鹿角市を訪れ、イベントや、祭りに参加して帰るだけというのが、地元の人には受け入れてもらえるのかという不安を抱えて鹿角を訪れた。しかし、鹿角の人々は温かく受け入れ、都会で育った自分の冷め切った心に、熱を与えてくださったのだ。

鹿角市の魅力は自然観光地が多いことや祭りの盛り上がりが挙げられるだろう。しかし、自分は鹿角市全体が持っている「心の熱」から生み出される「温かさ」も魅力の一つであり、まるで空気の熱伝導のように意識せず伝えることができるのが、鹿角市全体での魅力であると思う。これからも鹿角市を訪れる人はこの「心の熱」にふれ、人との関係の中での「温かさ」を育んでゆくのだろう。

鹿角市中高生との地域活性化活動を終えて学んだ3つのこと

経営学部経営学科2年 加藤 佳

私は、秋田県鹿角市の中心市街地で2024年8月5日から14日までの10日間、本大学の学生8名と鹿角市の中高生8名の計16名でチャレンジショップ、旧関善酒店インターンシップ、インタビュー調査の実習を行った。そして、その3つの経験をもとに、鹿角市中心市街地の地域活性化にむけた課題をブラッシュアップしその解決策を考え紙新聞にまとめた。今回は、10日間に及ぶ実習で学んだことを報告する。

私が実習で学んだことは、3つある。1つ目は、相手に自主性を促すことの重要性である。私は年上の大学生ということ意識しすぎ、紙新聞を作る際に高校生に対して細かく指示を出していた。しかし、なかなか作業が進まなかった。そのため、次の日は前日の反省を生かし、中高生に対して自主性を促し自由に作業してもらった。すると、あっという間に紙新聞が完成した。これらの経験から、年齢が異なる人と作業するときは、ただ指示を出すのではなく対話をしながら自主性を促すことも必要だということ学んだ。

2つ目は、目標やビジョンをもって本気で取り組むことの重要性である。NPO法人「関善賑わい屋敷」の勝山さんや「株式会社恋する鹿角カンパニー」の兎沢さん、鹿角市役所の職員の方々はそれぞれビジョンをもっており、ビジョンのためにいきいきと活動しているように見えた。そして、私も「学生の目線を生かして鹿角市を良くしたい。」というビジョ

ンをもって活動したところ活動が充実した。この経験からビジョンをもつ重要性を学び、学生生活や就職活動の際にビジョンをもって本気で取り組むことが重要であることを考えた。

3つ目は、継続的な地域の活性化の難しさである。今回、鹿角市内でアンケート調査を行い、地域活性化の案を考えた。その際に、財源の問題やステークホルダーの問題を考慮することに苦戦を強いられた。そのため、継続的な地域活性化は複雑な問題が絡み合っていることを学んだ。

結論として、私が今回のチャレンジショップ、旧関善酒店インターンシップ、インタビュー調査という3つの実習で学んだことは、相手に自主性を促すことの重要性、目標やビジョンをもって本気で取り組むことの重要性、継続的な地域の活性化の難しさの3つである。10日間に及ぶ実習の中で、人の温かさを前面に感じた10日間であった。鹿角市の方々には大変お世話になったため感謝を述べたい。私は、既に鹿角市を第2の故郷であると思っている。そのため、来年以降もプライベートで訪れるなど何らかの形で関わり合っていきたい。

発展 FS「鹿角中心市街地」実施レポート

経営学部経営学科2年 長妻 桃花

1.序論

私は今回の発展 FS のプログラムを通して住民の鹿角市への思いの強さを実感することができた。駅前観光案内所・コモッセ・道の駅あんとらあ・チャレンジショップで行った「街頭インタビュー」では鹿角市民の声を直接聞くことができ、花輪ねぶたや花輪ばやしなどの伝統行事の魅力、自然の豊かさ、街並み、環境など様々な面から鹿角市への思いを感じられた。本レポートでは「街頭インタビュー」に焦点を当て、気づきや学び、それをどのように今後に生かすかについて述べていきたい。

2.本論

駅前観光案内所・コモッセ・道の駅あんとらあ・チャレンジショップでインタビュー調査を行う上で鹿角市民が鹿角市を魅力的に感じ、自分たちで良くしたいと思っている人やチャレンジショップのような中心市街地の未来について考え関わりたいという意思を持っている人が多いことに驚きを感じた。例えば花輪ねぶたや花輪ばやしなどの幻想的な感動、鹿角市の温かい雰囲気が気に入っていることから、鹿角市に大学がないため進学時に離れるのは仕方がないがいつか絶対に戻ってきたいという若い世代の声も集められた。私は鹿角市を訪れて初めて商店街を散策した時に人通りが少なくお店がほぼ開いていないので寂しい印象を受けた。この時の私はお店を増やすしかないのではないかという単純な発想しか思いつかなかったが、このような思いを持っている人たちが多く鹿角市であれば新たな商店街の在り方が可能だと大きな可能性を見いだせた。このように実際に住民に聞いてみるとわからないことがたくさんあることを知り、その意見が一番より良くするための一歩に繋がることを学んだ。また地域の人の関心をどのようにつなげて実践していくかが重要であることも感じることもできた。私は地域の人たちが集まって交流できるコミュニティ

カフェを運営しているので、今度はその場所で来店されたお客様にインタビュー調査を試みるという新たな試みをしてみたい。

3.結論

発展 FS では「街頭インタビュー」から多くの気づきや学びを得ることができた。このような経験をこれからは私が行っていた活動に活かし、地域により貢献していきたいと考えた。

発展フィールド・スタディーズ活動レポート

教育学部教育学科 2 年 緑川 湖子

私は、フィールド・スタディーズを通じて、多くの人々と関わりながら、鹿角市を盛り上げるためにはどうすればよいのかを考えることができた。

インタビューでは、若者の居場所が少ないこと、祭りが過去と比べて変わったこと、インフラが整っていないことなど、鹿角市の課題についてさまざまな意見が聞かれた。課題として感じる部分は人それぞれ異なり、多角的な視点からの改善が必要であると感じた。チャレンジショップでは、普段人通りが少ないと思われる場所に人が集まり、賑わっていた。しかし、人が集まらない時も多く、来場者の中には関係者が多かったように思う。地域の特産品を道の駅だけでなく、今回のような場所でも販売するというアイデアは良いと思ったが、市民が積極的に参加し、市街地を活性化させるには他のアプローチも必要であると感じた。ワークショップでは、地元の中高生と一緒に鹿角の地域活性化について考えた。私の好きなアニメが聖地巡礼によって地域活性化に貢献した実例を知っていたため、過去に鹿角市が映画の舞台として使われたこととあわせて、映画やアニメの誘致が有効ではないかと考えた。これまでの経験や知識がこのような場面で役立ち、実際の事例を参考にすることや、幅広い知識を蓄えることの重要性を実感した。また、地元の人にしか分からない鹿角市と、私たち第三者の視点から見た鹿角市をあわせて考えることで、一方だけでは気づけない新たな視点から問題を捉えることができたと思う。

今回のフィールド・スタディーズを通じて、鹿角の人々と多く関わるすることができた。一人一人が鹿角市に対する強い思いを持ち、自分の街をより良くするために考えている姿に触れ、このような街に対する愛が地域活性化の鍵となるのではないかと感じた。課題はたくさんあるが、それでも地域の人々に愛されているのは、それだけ鹿角には素晴らしいところがあるからだと思う。そうした魅力を大切に、もっと多くの人に伝えられればよいと感じた。このようにして、私は、地域活性化に関する多くの学びを得ることができ、地域をより良くするためにはどうすればよいかを考える良い機会となったと思う。

かづの未来アカデミーに参加して

秋田県立鹿角高等学校3年 石黒 亜惟

かづの未来アカデミーに参加し、自分が鹿角市のことについてまったく知らないということを感じました。今まで素通りしていた道も何年もの歴史があり、多くの人が関わっているのだと学びました。

私は今まで鹿角市が住みやすい街にするためには地域全体を変えることが大前提だと考えていました。しかし、全てを変えるのではなく、イベントの広告が可能な場所を設けたり、中心市街地のマップを作ったりするなど少しの工夫でも地域は変わります。たしかに、地域の方にお話を伺った際に駐車場がないや交通手段が少なく不便だという声が多くありました。高齢化が進む中、難しい課題ではありますが対策はできるのではと考えをもつようになりました。地域を変えるために自分なりの考えだけでなく、別視点からの新しい考えを見出すために大学で深く学びたいと思うきっかけとなりました。

チャレンジショップや街頭インタビューなどで多くの方とお話する機会がありました。その中で鹿角市以外の方とお話をした際、「鹿角はとてもいい街で好きだ」と言っていました。その言葉は素直に嬉しかったです。鹿角には自然があり、美味しい食べ物があり地域の方がとても優しいです。それは当たり前のことではないのだと気付かされました。今まで知ろうとしてなかっただけで鹿角には魅力的なものが沢山ありました。

このプロジェクトを通じて鹿角が好きになりました。これから鹿角のことをもっと知り、育った鹿角のために自分ができることはなんなのか、探したいと思っています。

かづの未来アカデミーに参加して

秋田県立鹿角高等学校3年 齊藤 花穂

私は今回のプログラムに参加する前までは鹿角市は遊ぶところもないし、人口も減り続けて過疎化も進んでいるし、もう早く都会に出たいとマイナスな印象を持っていたが、参加後は、都会にはないいいところもたくさんあると改めて分かった。自然や特産品をもっと生かして全国にも知ってもらいたいと思う。

かづの未来アカデミーに参加して

秋田県立鹿角高等学校3年 齊藤 柚希

プログラムに参加して、鹿角市は賑やかな街になれる可能性がまだあると気づくことができた。今まで鹿角市について知った気になっていたが、チャレンジショップや街頭インタビュー、ワークショップを通して鹿角市のファンを増やすことで、鹿角市が賑やかな街になると考える。しかし、鹿角市は魅力をまだ上手く発信できていないことが課題だと思う。実際、鹿角市には自然が豊かなこと以外にも、街の人が温かいことや伝統的な行事が豊富なことなど様々な魅力がある。鹿角市の魅力の認知度を上げるために私ができることは、SNSを活用して地道に広告活動をしていくことだ。SNS アプリを使い分けてそれぞれ多く利用し

ている年齢層が異なるのでターゲット層に合わせた広告活動をしていきたいと思う。また、日頃から鹿角市のイベント情報をチェックして積極的に参加したい。

かづの未来アカデミーに参加して

秋田県立鹿角高等学校 3年 佐藤 のぞみ

私はこの5日間、鹿角未来アカデミーに参加し、たくさんの学びを得ることができた。

まずは他者と関わることの大切さである。大学生や地域の人たちと話すことで、鹿角市の情報はもちろん、これまで気づかなかった意見や当たり前だと思っていたことを覆す意見など様々な意見が聞け、自身や地域の可能性を広げるきっかけになった。次は実際に体験することの大切さである。ワークショップやインタビューに参加して、生で地元の人々の声を聞き、現状を知ることができた。また、自身の視野が広がったり、新たな視点を得たりとさらに成長することができたと思う。

これらの学びを私は大学や就職に生かしていきたいと考える。大学では地域政策を学ぶので、この体験を元に地域の活性化について研究したい。就職では将来は公務員に就きたいと考えているので、大学の研究を通して今回培った学びを生かし、地元の人々と密着した地域づくりに貢献したい。

かづの未来アカデミーに参加して

秋田県立鹿角高等学校 3年 田中 杏佳莉

このプログラムに参加してみて、鹿角市の良さを再確認することができました。また、大学生の方々と交流する機会があまりないため、貴重な経験になりました。

活動する上で、コミュニケーションの大切さを学びました。友達と参加したけれどグループ活動では離れてしまって自分から交流を図る必要がありました。自分から積極的にいくことが苦手だったので、大学生の皆さんが話しやすい空気を作ってくれたり、沢山話しかけてくれたりしたので嬉しかったです。また、チャレンジショップでは来てくれたお客様に商品を紹介したり、お店を案内したり、普段できないような経験ができ、とても楽しかったです。これから大学に進学して社会に出ていく際に、多くの人と関わる機会が増えると思うので、大学生の皆さんが接してくれたような接し方で関わっていきたいと思います。

かづの未来アカデミーに参加して

秋田県立大館鳳鳴高等学校 2年 三ヶ田 陽香

私は、地域活性化に興味があり、経営学部の先生のお話も聞いてみたいという気持ちで参加した。私が思っているよりも大人の市民の方々は子どもの居場所を課題としてくれることが驚きであった。最終的な班ごとの発表を通して思ったことは、何かプロジェクトをしようにもお金がかかり、行動に移せず、悪循環が続き、地域活性化は何かのきっかけがないと難しいと感じた。学生などのボランティアでお金をかけない案も良いが、やってみない

と改善をすることはできないと思う。私はこの気づきから将来自分がやりたいことを考え直すことができた。私はこれから活性化のきっかけを作るためにも起業して市政という組織ではすぐに実行に移せない市民の意見に沿ったプロジェクトを行えたら良いなど考える。行動力・チャレンジ精神を武器に頑張っていきたい。チャレンジショップでの接客もとても良い経験で、マーケティング学をより学んでみたいという気持ちが強くなった。

かづの未来アカデミーに参加して

秋田県立鹿角高等学校 1年 海沼 実羽

高校で鹿角についての自分が調べたいことを調べる時間があるのでその時間で自分がこのプログラムで学んだことをいかせたらなと思います。自分は鹿角市に少しでも多くの人が残って欲しいと思っているのでどうしたら若い人たちが残ってくれるのかプログラムをどうして高校生などに聞いたことを活かして自分の考えをまとめたいと思います。

かづの未来アカデミーに参加して

鹿角市立十和田中学校 3年 成田裕帆

チャレンジショップをやって、たくさんの方が買いに来てくれました。そこに来た人全ての方が鹿角のことが大好きな人たちばかりだと感じました。鹿角から出て行った人も鹿角を嫌っているわけじゃなくて鹿角に就きたい職がなかったり、鹿角での子育てが難しかったりしたことが主な理由だと思いました。

私は大学進学のために鹿角からでてまた就職のときには戻ってこようと思っています。今回のプログラムで鹿角にしかないものを最大限に利用して都会にはないもの鹿角にだけあるものが作れば良いのだと思います。

そして、中学生のうちに大学生と一緒に調査・研究できたことは私にとってとても有意義になり、大学進学への意欲がとても大きくなりました。これからも、鹿角の良さを私なりに突き詰めていきたいと思いました。

資料編

調査票

市民の新たな居場所としての中心市街地を考えるアンケート

(中心市街地について)

中心市街地とはその地域の中心となる地区のごとく、鹿角市の中心市街地は鹿角花輪駅、商店街を中心としたエリアとしています。中心市街地は地域の皆さんが生生活用品等の買い物をする場として発展してきましたが、現在、流通システムの発展、IT化、ライフスタイルの変化などを背景に買い物に加えて、多様な可能性をもった空間としての期待もあります。

そこで、中心市街地の多様な可能性について皆さんのご意見をお聞かせください。

1. 中心市街地で買い物以外に魅力を感じるのはいずれですか？(複数回答可)

①飲食・飲酒 ②イベント・催事 ③散歩・ジョギング ④ジム、トレーニング
⑤習い事 ⑥理美容 ⑦街歩き ⑧自由な居場所
⑨その他 ()

2. 1. でお答えいただいた様々な魅力を感じるものに対して、あなたはどのように関わりますか？(複数回答可)

①お客、又は利用者として関わる ②自分で企画し、主催する
③補助や助成があるなら主催したい
④その他 ()

3. 中心市街地の居場所について、あなたのイメージを教えてください。

4. 中心市街地で行われるイベントについて、あなたのイメージを教えてください。

5. (各チームで聞きたい質問を考える)

(回答者について)

1. 住所

①鹿角市花輪地区 ②鹿角市十和田地区 ③鹿角市尾去沢地区 ④鹿角市八幡平地区
⑤秋田県の他市町村 ⑥近隣県 (青森県、岩手県、宮城県、新潟県、福島県)
⑦東京圏 (東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)
⑧その他 ()

2. 性別

①男 ②女 ③その他

3. 年齢

①20歳未満 ②20歳代 ③30歳代 ④40歳代 ⑤50歳代 ⑥60歳代
⑦70歳代以上

4. 職業

①自営業 (商店主、個人経営者など) ②自由業 (開業医、弁護士、芸術家など)
③管理職 (企業の課長以上の役職者など) ④事務職 (一般事務、営業職など)
⑤専門職 (看護師、教員、技術者、研究員など)
⑥労働職・サービス職 (工場勤務、建設作業従事、運転手、販売員、理美容師など)
⑦パート・アルバイト ⑧専業主婦 (夫) ⑨学生 ⑩無職 ⑪その他

(調査員)

1. 氏名

2. 調査地点

3. 調査地点の感想

調査結果

1. 回答者概要

住所	花輪	十和田	尾去沢	八幡平	県他市町村	近隣県	東京圏	無回答	合計			
	85	25	13	21	20	28	24	44	260			
性別	男	女	無回答	合計								
	89	152	19	260								
年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	無回答	合計			
	73	20	34	19	31	20	52	11	260			
職業	自営業	自由業	管理職	事務職	専門職	労働職・サービス職	パートアルバイト	専業主婦	学生	無職	その他	合計
	12		5	37	11	7	11	20	74	36	7	220
買い物以外	利用する	利用しない	合計									
	119	132	251									
上記目的	芸術鑑賞	散歩・ジョギング	飲食・飲酒	子供の遊び	保育・託児	友達と談話	ボランティア	イベント・集会	勉強・読書	その他	合計	
	3	15	25	5		8	2	10	22	19	109	
イベントへの関わり方	1.すでに自分で主催・企画している	2.きっかけがあれば参加したい	3.既に参加・利用している	4.きっかけがあれば参加・利用したい	5.既に場所を買したり寄付をするなど協力している	6.場所を買したり、寄付をするなど協力をしたい	7.特にかかわる考えはない	8.その他	合計			
	2	6	4	42	0	0	26	0	80			

2. 中心市街地を利用しない理由

観光(7件)	行く機会が少ない
県外(4件)	行く時間が無いから
市外在住のため	市街地にあるお店を把握していなかった
目的がない(3件)	場所がない
インフォメーション不足(2件)	誰も歩いてないから
バスが少ないから	通勤だけ
飲食	年齢的に厳しい
家から遠い	魅力がないから
帰省できているから	

3. 中心市街地の課題

<p>1. 中心市街地の現状</p> <p>活気がない</p> <p>市民の人が地元で買い物しようという意識低い</p> <p>地域の特産物を商店街で18時以降の営業がない</p> <p>文庫が少ない</p> <p>人が少ない</p> <p>地元の人が街に興味ない</p> <p>お客さんとお店の人との交流が少ない</p> <p>人口少ない</p> <p>人少ない</p> <p>人が居ない</p> <p>利用するものがない</p> <p>店少ない</p> <p>商店街がさみしい</p> <p>ガラガラ</p> <p>人少ない</p> <p>人が居ない</p> <p>店が少ない（チェーン店ない・ハンバーガー高い）</p> <p>空いている店に限られている（飲食店）</p> <p>2. 商店への見方</p> <p>入りづらい雰囲気</p> <p>入りづらい・シャッター街</p> <p>ひとりで入っていいかわからない</p> <p>飲食店メニューの種類が少なく、目新しさを感じない</p> <p>在庫がない</p> <p>値段が高い</p> <p>ものがすぐに手に入らない</p> <p>種類が少ない</p> <p>ほしいものがない</p> <p>店・イベントが少ない</p> <p>独自性の確立</p> <p>営業時間</p> <p>個人のお店は難しい</p> <p>ご飯ついでになにか食べるようなものがほしい</p> <p>自分の子どもに継げず自分の代でお店を開めているところがある。</p> <p>3. 中心市街地に対する若者の声</p> <p>若者が楽しめる場所がない</p> <p>地元の友人と会ってゆっくりするところが少ない。</p> <p>もっと若者がいる喫茶店を求む</p> <p>20代30代が気軽に来れたり携われたり</p> <p>もっと若者がいる喫茶店を求む</p> <p>ゲーセンがない</p> <p>若い人が遊べる場所がない</p> <p>若者向けの店少ない</p> <p>利用者少ない（特に若者）</p> <p>カラオケがない</p> <p>カフェが少ない</p> <p>レンタルビデオ屋もない</p> <p>遊べる場所がほしい</p> <p>遊ぶ場所がない</p> <p>遊ぶところがない</p>	<p>4. 中心市街地に対するファミリーの声</p> <p>気温が高くて、子供が室内で遊べる場所を探している</p> <p>飲食店にキッズスペースがほしい</p> <p>子連れで利用できる飲食店ない</p> <p>5. PR不足</p> <p>インフォメーション不足</p> <p>PR不足</p> <p>宣伝が難しい</p> <p>チラシがわかりづらい・誰でも貼れる掲示板ほしい</p> <p>広報・宣伝</p> <p>一気に見られるサイト（飲食店）</p> <p>6. 交通の利便性</p> <p>バスが少ないから</p> <p>駐車場がない・わかりづらい</p> <p>駐輪スペースがほしい</p> <p>バスで来ないといけない・スーパーに来るのが精一杯</p> <p>バス少ない</p> <p>飲酒後の交通手段</p> <p>交通の便が悪い</p> <p>飲み会帰りの交通手段</p> <p>7. 中心市街地に足りないもの</p> <p>Wi-Fi環境が悪い</p> <p>街灯が少ない</p> <p>道路ポコポコ</p> <p>デスクワークの利用時間</p> <p>レンタルDVD店がない</p> <p>デリバリー</p> <p>芸術とふれあう機会の少なさ</p> <p>休むところがない（駅周辺）</p> <p>休憩所がない</p> <p>チェーン店がない</p> <p>公園が欲しい</p> <p>キャンプ場が欲しい</p> <p>ドッグランが欲しい</p> <p>8. イベントの可能性</p> <p>今回のようなイベントがあると帰省して遊ぶことができ楽しい。</p> <p>イベントがあっても、発信・広報しているけど薄い</p> <p>イベントが少ない</p> <p>イベントある時はワクワク、通常の際は楽しくない</p> <p>企画者への負担でかい</p> <p>9. その他</p> <p>学校遠い</p> <p>図書館が寒すぎる</p> <p>図書館寒い</p> <p>学校嫌だ</p> <p>帰省すると、自然がたくさんあり、ゆっくり過ごすことができる</p> <p>十和田区にマックスバリュー等があるため中心市街地にこない</p>
---	--